
瓶覗の空

言 葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瓶覗の空

【Nコード】

N3561A

【作者名】

言葉

【あらすじ】

へたれの代表格 光田茂樹、保育士志望。そんな彼が保育園で出会った子どもたちとの不思議で、怪奇な事件。今、その柔らかな音色が静かに転がり出す。ギャグ専門の作家たちが挑む、ホラー小説！

ブログ：『イ』（前書き）

この作品は、ネットで活動する作家サークル『言葉』のメンバー達が、共同執筆で書き上げていく連載小説です。

「いろはに…ゑひもせすん」の全48の単語を頭に使った48のお題を使い執筆。

1週間で1題更新。リレー小説形式で1題ごとに筆者を交代させていきます。

最終的には、ひとつの物語となる予定です。どうぞお楽しみ下さい！

プロローグ：『イ』

プロローグ：

『いくじなし』

男は常に世を恐れていた。

静かに波紋を起こしていく壇上の声。どこか悪天候を予想させる教授の講義から目を背け、窓の外に視線を移してさえ。

其処に映っている毒々しい夕日の眼差しも、鳥のように笑う学生達も。男にとっては指を滑らせただけで剥がれ落ちそうな和やかさだった。

彼らの中に自分がどう順応すれば良いのかわからず、そしてまた引け腰を隠せない。

細長い固定机には学生同士のかたまりが散りばめられ、より一層男の孤島ぶりを強調させていた。居心地悪くその瞳が動く。

その動きにあわせて、先程から落ち着きのなかった左手は拳動不審にジッポーを弄んでいく。

右手の指先はカーゴパンツのポケットに滑り込んで煙草のケースを探っていた。まだ未開封であったビニールの、真新しい感触。

窓の外で鳥が飛び立った。瞬間。周囲の音が一斉に弾けた。

今がチャンスだった。ジッポーを掴むと男はよろけるように立ち上がり、具合が悪いんです、と教授に伝えて教室を後にする。

早足で廊下に出てすぐに煙草の封を切る。火をつけると長々と息を吐きだした。おっかなびつくり躍動をみせる紫煙。それはあつという間に拡散した。

予想通りの台風襲来だ。背中越しに教授の怒声が跳ねていく。鳥が鳴きやむよりも早く。俊敏な反応で男は身をすくめた。

それが男 光田茂樹の日常だった。

《文／綾無雲井》

第一章：『口』

第一章：

『ロンドン橋』

外の風は、肌にまとわり付くように生温く、梅雨の時期を思わせるようであった。

しかし、三日前の梅雨開け宣言を思い出せば、これもそのうち夏の風に変わるだろうと予測できた。少しずつ、着実に季節は夏へと変わりつつあるのだ。

憂鬱な講義と華やかな学生達から逃げ出した茂樹は、独り中庭のベンチに腰を掛けていた。

ここは校内で一番季節の変わり目を感じることが出来る場所である。

花などが植えてあり、風通しも良かったりするのだが、学生達には大した人気もなく図書館への近道に使われる程度のものであった。それでもベンチが置いてある所為か、ちらほら学生の姿が見受けられる。彼らは次の講義までの空き時間を潰しているようであった。茂樹もそれらに混ざり時間を潰す。

但し彼は次の講義に出る気はなく、講義終了の鐘の音と共に大学を後にする学生に紛れて帰るつもりであった。

別に何で暇潰しするでもなく、ただ時間が過ぎるのを待つ。丁度良く日が当たるので意識が遠退いたりする。

その所為か、中々声を掛けられている事に気付かなかった。気付いたのは鈍い音と共にベンチが揺れたからである。

「光田君、隣に座っていいかしら？」

顔を上げてみれば一人の女が茂樹を見下ろしていた。

「今の音と揺れは」

「本をベンチに置いただけよ」

ちらりと横に目をやれば本の束が置いてある。彼女は図書館帰りのようだ。

中々覚めない頭で先程近くのベンチが空いていたのを思い出す。

彼女が図書館から来たのなら、空いたベンチを見かけたはずだ。

「向こうに一つ空いてただろ？」

「あそこは両隣が煩いのよ。課題に集中できないわ」

「課題？」

「児童心理学についてよ。私は童謡の影響について、卵が落ちた、橋が落ちたとかいう詩よ」

そこまで言うとな彼女は無断でベンチに腰を落とした。その時自分で置いた本が邪魔だったのか茂樹の方へと押しやる。

「あなたも同じ課題出されたでしょ？何を調べるの？」

「出されてない」

「あら？それじゃ何かしら。でも私と同じ講義を受けてるはずよ？」
彼女の台詞の最後は問い掛けるような形で茂樹に思い出せと言っているようであった。

しかし、彼は人の名前と顔を覚えるのが苦手で、高校の三年間でクラス全員の名前を覚えた事は一度もなかった。それを、同じ講義を受けている奴を思い出せと言われても無理な話である。

全ての講義で顔触れが違ふのだ。

「まあ良いわ、また何かの講義で会ってしょ。井野蝶子よ、覚えておいて」

「俺は」

「光田茂樹でしょ」

《文／小島ちや》

『八』

『破天荒』

梅雨らしい、生ぬるく湿った風が、茂樹と蝶子の微妙な隙間を、ひゆるり、と通り抜けて行く。

まるで、今の自分の心境をあらわしている様だ、と茂樹は思った。

「……………」

茂樹は、蝶子の言葉に何も返さず、長く伸びた煙草の灰をトンと落とした。

無言なのは、蝶子の名前を思い出せなかった気まずさか、或いは、遠慮の欠片もない彼女への引け目のせいかもしれない。

もしくは、ただ単に、言葉を発するのが面倒なだけか。

「なぜ知ってるのかって顔ね」

そんな事は思っていないと、うんざりしつつ、茂樹は、そうだな、と答えた。しかし、話をふった当の本人である蝶子は、茂樹の適当な返事をいい方にとったのか、ふふつと笑った。

「保育科なのに、堂々と喫煙し、なおかつ誰ともつるまない人なんて、すぐに覚えられるわ。第一、名前が印象的過ぎね」

蝶子に、キツパリと痛い所を言い切られた茂樹は、知らぬうちに眉をひそめた。

そして、おもむろに左手を引き寄せ、仮病ではなくなった、キリキリと責め続ける頭痛を和らげる為、肺をニコチンで満たす。すると、それを見た隣に座っている蝶子が、すかさず口を開いた。

「やめてよ。非喫煙者が隣にいるのに、遠慮がないわね」

だから、一人なんじゃないの？、と言いたげな蝶子は、不快そうに、顔をゆがめた。

「……………」

じゃあ此処に座るなよ、
と言えない茂樹は、
顔を背けるだけで、
精一杯だった。

《文／しろつ》

『日記』

茂樹の毎日は大体がこの調子だった。しかし大学の校舎から離れて一度家に戻れば、日々の暮らしの改良を考えなくもなかった。大学に入学した当初は、はっきりとした目的があった。

しかし。女性が感じる幼児教育と、男性が感じる幼児教育の間にある隔たりの答えを見つけられずにへなへなど、煙草に縋りつく日々がすぐに訪れた。

そこに蝶子のようなきつぱりとものを言う女性が現れて、ますます幼児教育は自分のような男性には不向きと考え始めた。どうにかしたいと思う気持ちと、どうにでもなれと思う気持ちが、心の中を行ったり来たりしている。いくじなし。自分の心の中に浮かぶ言葉それを殊更に増幅させている蝶子が、今、隣で人格発達論の本を読み始めた。

眼鏡をかけた瞳を茂樹に向けて、彼女は言った。

「あのね、光田君。ここの学校の学生の中には幼稚園の先生になりたいとか、児童の臨床心理士になりたいとか、目標を持って学校へ来ている人だっているのよ。お喋りをして、教授に叱られている輩や貴方みたいにすぐ煙草に頼る軟弱な人のためだけに、この学校はあるんじゃないのよ。そのところを考えて、もう少し学校の敷地内での喫煙を減らしたらいかかしら」

茂樹は最もなことを言われて、パンツのポケットから携帯灰皿を取り出して、短くなった煙草をもみ消した。

そして、ベンチの背もたれに背中をあずけて、空をあおいだ。蝶子の着ている赤い服と、空の茜色のコントラストが気だるい睡魔を呼び寄せる。課題は気にならないふりをした。隣でページをめくる音と、呼応するかのようにいつの間にか彼は、眠ってしまった。

蝶子はそんな茂樹を見つめた。

(……………)

あまりに、怠惰な態度をとっているので呆れ返って、黙り込んでしまっしかなかった。

もうすぐ実習があるのだから、だれと一緒にいくのかが、不安の種だった。傍らで眠っている茂樹から目を離すと、溜め息をついた。このことが、その日の日記のメインになったことは言うまでもない。何故そこまで、並々ならぬ思いでいるのか。それは、蝶子の家が代々教育者の家柄で、ご多分にもれず小さな時から、保育士を夢見て勉強してきたのだった。

けれど、現実には鳥のような学生達が授業の邪魔をしたり、傍らで眠りこけている茂樹みたいな学生がただ、そこにいる。

実習で事なきを得るには、ここにいるこの人だけでは、一緒に実習に行きたくないと、思った。

文／羽凍 哉

『水』

『包容』

茂樹が我に返り、眠っていたのだと自覚した頃には、蝶子はもうその場にはいなかった。辺りにはさつさと門外に出ようとする人影があるが、学内に入ってくるような人間はいなかった。少し寝たふりをしてその場しのぎをしようとしたのが、少々本気で眠ってしまったようだ。

ポケットに手をつ込み、目当ての煙草を取り出すと、茂樹は一本を手慣れた風にくわえる。ライターの火をぼんやりと見つめ、肺まで敷き詰めた紫煙をゆっくりと吐き出した。

「呆れた。あなた、まだ居たの？」

今日聞いたばかりの声の調子に少なからずげんなりとした茂樹は、背後からした声の主を仰ぎ見た。

「君こそまだ居たのか。課題ご苦労さま」

「授業の終わりよ。課題は今からまたやるの。あなたもやるなら良ければアドバイスして差し上げるわよ、大学に五年も居たくないでしょう」

余計なお世話だ、と蝶子を睨みつけるが、口に出して彼女を退ける勇氣は茂樹にはなかった。義務教育でもないこの学園に、自分を包容しようという人間はもう見なくなっただからだ。まあ、彼女にその気があるのかは不明であるが。

「いや、帰る。ご厚意だけいただいておくよ」

「別に無理して持つてかなくたって結構よ。実習の足手まといにだけはならないでくれればね」

「実習？」

初耳だというように蝶子を振り向いて言葉を繰り返す。蝶子には有り得ないというふうな表情で、大袈裟に肩を落としてわざとらしくため息を吐いた。

「あなた……何のために幼教に入ったの？」

《文／875》

『へ』

『変化』

そりゃあ、子供には策略的なものがないから俺に適した仕事だと思っただ、と茂樹は言いたかったが、そんな言葉を蝶子に返す度胸など毛頭ない。

高圧的な彼女に押され気味になりながら、何か他に言葉を返そうとしたが、結局は非喫煙者の文句を怖れて出会ったばかりの煙草とおさらばするだけだった。そんな茂樹を見て、蝶子は諦めたように口を開く。

「来月の教育実習、アゲ八保育園に一週間。うちの大学からは光田君と私、ふたりで行くのよ」

「……君と俺だけ？」

「他大からあと二、三人来るらしいわ。それと今、光田君は私を『キミ』って言ったけど。子どもたちと触れ合うときにはちゃんと名前前で呼んで。名前も、顔も忘れてはいけないわ」

「ああ、わかった」

赤に映えるワンピースと、紅いフレーム越しの強そうな瞳が茂樹を見下ろしている。井野蝶子。同じ講義を履修していたなら尚更。彼女の名前こそ、何故今まで覚えられなかったのか不思議に思えるくらい印象的だった。テキパキと話を進めて相手を自分のペースに巻き込んでいく。苦手なタイプの女だった。

次第に減っていく学生の姿を眺めながら、茂樹は独り暮らしをする自宅の冷蔵庫に食べ物があつたかどうかを考えた。思い出せない。「実習で積んだ経験を基に、研究論文を書くのよ。あなた本当に大丈夫なのかしら？」

反応が薄いと思ったのだろう。蝶子は端正な顔をしかめると、児

童心理学の書籍リスト 図書館で検索したものだろう を御丁寧に茂樹の横に置いて、まるで妥協案を出しているかのように言った。

「来月までに、このリストにある本を読んで勉強した方がいいわ。実習とはいえ、子どもと触れ合っんですもの、半端な気持ちじゃできないでしょう?」

「ごもつとも」

さも予習は当然であると言いたげな蝶子を前に、茂樹に用意された台詞はそれしかなかった。

それにしても蝶子と会ってから、一度としてニコチンを満喫できていない。口もとの寂しさに耐えかねた茂樹は、尻ポケットから携帯を取り出す。

「あ。もしもし?」

眉間に皺を寄せて実在しない相手と緊急の交信をしながら、慌しく立ち上がった。申し訳なさそうな表情を貼りつかせて彼女を振り返る。

「わり。ちょっと電話が。急用みたいだから、俺帰るわ」

「どうぞ。私はまだ帰らないわ」

足早に立ち去る茂樹を、片眉を上げて見送る蝶子はこの後も勉強に励むのかもしれない。携帯を片手に現実から逃避しようとしていた茂樹は、大学に入学して以来初めての罪悪感を覚えて、思わず蝶子に向かって叫んでいた。

「教育実習、よろしくな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3561a/>

瓶覗の空

2010年10月9日05時21分発行